10　この文章の主人公は、すべてにおいて秀でた中納言である。次の場面は、中納言が恋い慕う姫君（宮）の邸を訪れて、まず取りつぎの女房（宰相の君）と会い、姫君への面会を申し出るところである。これを読んで、後の問いに答えよ。 〈新潟大〉　二〇一四年度出題

　さへ割れて照る日にも、Ａ袖ほす世なく思しくづほるる。十日の月くまなきに、宮にいと忍びておはしたり。宰相の君に①消息したまへれば、「恥づかしげなる御ありさまに、いかで聞こえさせむ」と言へど、「さりとて、もののほど知らぬやうにや」とて、妻戸おしあけ、対面したり。うち匂ひたまへるに、よそながらうつる心地ぞする。なまめかしう、心深げに聞こえつづけたまふことどもは、奥のえびすも②思ひ知りぬべし。「例の、かひなくとも、かくと聞きつばかりの御ことのはをだに」とせめたまへば、「いさや」とうちなげきて入るに、やをらつづきて入りぬ。

　Ｂ臥したまへるところにさし寄りて、「時々は、端つ方にても涼ませたまへかし。あまりれ居たるも」とて、「例の、わりなきことこそ。えも言ひ知らぬ御気色、常よりもいとほしうこそ見たてまつりはべれ。『ただひとこと聞こえ知らせまほしくてなむ。野にも山にも』と、かこたせたまふこそ。わりなく侍る」と聞こゆれば、「いかなるにか、心地の例ならずおぼゆる」とのたまふ。「いかが」と聞こゆれば、「例は、宮に教ふる」とて、動きたまふべうもあらねば、「かくなむ聞こえむ」とて立ちぬるを、声をしるべにて、たづねおはしたり。Ｃ思し惑ひたるさま心苦しければ、「身のほど知らず、なめげには、よも御覧ぜられじ。ただ一声を」と言ひもやらず、涙のこぼるるさまぞ、さまよき人もなかりける。

　Ｄ宰相の君、出でて見れど、人もなし。「聞きてこそ出でたまはめ。人に物のたまふなめり」と思ひて、しばし待ちきこゆるに、おはせずなりぬれば、「なかなか、Ｅかひなきことは聞かじなど思して、出でたまひにけるなめり。いとほしかりつる御気色を、われならば」とや思ふらむ、あぢきなくうちながめて、うちをばＦ思ひ寄らぬぞ、心はおくれたりける。

　宮は、さすがにわりなく見えたまふものから、心強くて、明けゆくけしきを、中納言も、えぞ荒だちたまはざりける。心のほども思し知れとにや、わびしと思したるを、立ち出でたまふべき心地はせねど、「見る人あらば、事あり顔にこそは」と、人の御ためいとほしくて、「今より後だに思し知らず顔ならば、心憂くなむ。なほ、つらからむとや思しめす。人はかくしも思ひはべらじ」とて、

　Ｇうらむべきかたこそなけれ夏衣うすきへだてのつれなきやなぞ

（『堤中納言物語』「逢坂越えぬ権中納言」より）

（注）宰相の君―─姫君の生活に責任を持つ立場の女房。

奥のえびす―─物の情をわきまえないとされる者の例。

野にも山にも―─「いづくにか世をば厭はむ心こそ野にも山にもまどふべらなれ」（古今集・雑下・素性）などを踏まえたもので、身を隠してしまいたい、という気持ちが込められている。

宮に教ふる─―宮（私）に、こういう時どうすればよいか教えてくれるではないか。だから今回も、という意。

問１　二重傍線部①「消息したまへれば」、②「思ひ知りぬべし」を、例にならって文法的に説明せよ。

［例］拝み（マ行四段動詞・連用形）　　奉ら（謙譲の補助動詞・未然形）　　む（意志の助動詞・終止形）

問２　傍線部Ａ「袖ほす世なく」とほぼ同じ意味で使われている表現を、本文の中から六字で抜き出せ。

問３　傍線部Ｂ「臥したまへる」・Ｃ「思し惑ひたる」・Ｆ「思ひ寄らぬ」の主語として、それぞれ適した人物を次の〔　　〕から選び記号で答えよ。同じ記号をくりかえし用いてもよい。

〔ア　姫君（宮）　　イ　中納言　　ウ　宰相の君　　エ　他の女房〕

問４　傍線部Ｄ「宰相の君、出でて見れど、人もなし」とあるが、なぜ中納言はいなかったのか。四十字以内で説明せよ。

問５　傍線部Ｅ「かひなきことは聞かじなど思して、出でたまひにけるなめり」を、主語を補って現代語に訳せ。

◎問６　傍線部Ｇは、中納言が詠んだ和歌である。この和歌にある「夏衣うすきへだて」とは、具体的にはどのような状況を表現しているか。本文の内容を踏まえて五十字以内で説明せよ。

# 【解答と採点基準】

問１　①＝消息し（サ行変格動詞・連用形）　たまへ（尊敬の補助動詞・已然

形）　れ（完了の助動詞・已然形）　ば（接続助詞）

「たまへ」の已然形は命令形も可。

②＝思ひ知り（ラ行四段動詞・連用形）　ぬ（強意の助動詞・終止形）

べし（推量の助動詞・終止形）

問２　涙のこぼるる

問３　Ｂ＝ア　Ｃ＝ア　Ｆ＝ウ

問４　Ａ宰相の君が姫君の部屋に入ったときに、中納言もＢ続いてこっそりと忍び込んでいたから。（40字）

Ｂがなければ全体０。「こっそり忍び込む」の意味のないのは減点５。「いっしょに」などは不可、減点５。Ａがなければ減点３。

問５　中納言はＡ聞いてもかいのない姫君の返事はＢ聞くまいとＣお思いになって、Ｄ帰ってしまわれたようだ。

主語である「中納言」がない、あるいは間違っているものは全体０。

Ａがなければ全体０。「かいのないこと」など、「かひなき」をそのまま置き換えたものは不可。「姫君の返事」が必要。「姫君の返事」を仲介するため「宰相の君の返事」も可とする。

Ｂ・Ｃ・Ｄがないものはそれぞれ減点２。

問６　中納言が姫君の部屋に忍び込んでＡ対面はかなったが、Ｂ姫君のかたくなな態度に二人がＣ打ち解けないでいる状況。（50字）

［別解］中納言が姫君の部屋に忍び込んで対面はかなったが、姫君のかたくなな態度にいま一歩踏み込めずにいる状況。（50字）

　　　　　Ａ・Ｂ・Ｃどれが欠けていても全体０。

　　　　　Ｂは「同じ部屋にいながら」なども可。

# 【現代語訳】

　大地さえひび割れて照りつける（炎天の）日にも、乾く間もない片思いの涙に袖を濡らし（中納言は）思い屈しておられる。十日過ぎの月がかげりなく照らす夕べに、（思い続けていた中納言もついに我慢ができず）姫君の所に人目を忍んでお出かけになった。（取り次ぎの）宰相の君に面会をお求めになると、「こちらが尻込みしてしまいそうな立派なあのお方に、どうして（何を）申し上げましょうか（、いや、言葉をかわすなどできません）」と言うが、「そうかといって（それでは）、ものの道理を知らないことになるかしら」と考え直して、（宰相は）妻戸を押し開けて、（中納言と）対面した。薫物の匂いに包まれなさる（中納言）に、距離を置いている自分にまで香りが移るかと思うほどだ。若々しく美しく、真剣に（姫君への）思いを申し上げ続けるひと言ひと言は、（物の情をわきまえないとされる）北の蝦夷でも心打たれるはずだ。「いつものように、だめであっても、こう聞いたと、せめてただそれだけの（姫君の）お言葉なりとも（お聞きしたい）」と（中納言が）せがみなさるので、「さあ、どうかしら」とため息まじりで（宰相が）奥へはいると、（中納言も）そっと（後から）続いて（姫君のいる母屋へ）はいった。

　（宰相は、姫君の）伏していらっしゃる所に近寄って、「時折は、（簀子の）縁近くの方ででもお涼みなさいませ。あんまり引っ込んでばかりいるのは（からだによくありません）」と言って、「いつものように、（中納言殿が）ごめんどうなことをおっしゃって。言いようもない（思い詰めた）ご様子で、いつもよりもおいとおしくお見受けいたします。『ただひと言（姫君を思う胸のうちを）お伝えしたくて（お訪ねした）。（お聞き届けいただけぬなら）野にも山にも（身を隠してしまいたい思い詰めた気持ちで）』と、お恨みで。困り果てております」と申し上げると、（姫君は）「どうしたのかしら、少し気分が悪くて」とおっしゃる。（宰相が）「どうご返事いたしましょうか」と申し上げると、「いつもなら、（あなたが）わたしに（返事のしかたを）教えてくれるじゃないの」と、動こうともなさらないので、「ありのままお伝えしましょう」と言って（宰相が）立ったあとに、（中納言は二人の会話の）声を頼りに、（ここを）尋ね当ててこられた。（姫君の）驚いて当惑するご様子がお気の毒なので、「身の分際をわきまえず、無礼な振る舞いをするふうには、決してご覧いただかないつもりです。ただひと言（のお言葉）を（いただきたい）」と言いも終わらず、涙のこぼれるさまは、恋にはなりふりかまわずのありさまであった。

　宰相の君は、（姫君のお部屋から）出てみたが、誰もいない。「返事を聞いてならお帰りになることもあろうが。女房とお話でもしていらっしゃるのだろう」と思って、しばらくお待ち申し上げたが、いらっしゃらないようなので、「なまじっか、問５（中納言は）聞いてもかいのない（姫君の）返事は聞くまいとお思いになって、帰ってしまわれたようだ。お気の毒なまでに思い詰めたご様子だったが、もしわたしなら（こんなにしてお帰ししたりはしないのに）」とでも（宰相は）思ったのであろうか、つまらなさそうにぼんやり思いふけって、部屋の内の（姫君と中納言が二人きりでいる）事態に思い至らなかったのは、うかつなことであったよ。

　姫君は、そうはいっても困惑したご様子だけれども、（それでも）気強い姿勢をかたくなに崩さぬまま、（夏の短夜の）明けゆく様子を、中納言も、（姫君のかたくななお心を無視したような）無理強いな行動はおとりにならなかった。切ない心をお察しくださいというのであろうか、（姫君が）苦しいと思っていらっしゃるのに、お帰りになる気にもおなりにならないけれども、「（この場を）見る人があったら、二人の間には何かあったと思うだろう」と、姫君のお立場が気の毒で、「せめて今後なりとも、（わたしの心を）おわかりいただけませんようなら、悲しいことで。それでも、つれなくなさろうとのお心ですか。（世間の）人は（われらのことを）こんなに（潔白な間柄だ）とは思いますまい」と言って、

　　　（我が身の一方的でいちずな恋だから）誰も恨みはいたしませんが、この夏衣のような薄い隔てでありながら、どうして心を通わすすべもないのでしょうか。